

鍋つかみ／両手に嵌めて待つ」と読んでい  
る、と思われる。(座談会「短歌は世代を超  
えられるかI」『短歌年鑑 二〇一五年版』  
角川、一三九P)。この読みは、五七五七七  
の韻律を重視し、それを歌の頭から当ては  
めていった読み、といえるだろう。

これに対して阿波野巧也は、へくもりびの  
／すべてがここに／あつまってくる／鍋つか  
み両／手に嵌めて待つ」と読んでいる。そし  
てその理由として、三句目を七音にすること  
で「リズムのギアが入り直し、勢いを止める  
ことなく下の句へとリズムの波が伝達してゆ  
く。」また「すべて「あつまって」の「て」が、手  
に嵌めて待つ」と結句の頭にくることによっ  
て、「リズムを力強く支えているのではない  
か。」とし、リズムの観点から自分の読みの  
有効性を論じている(「口語にとつて韻律と  
はなにか」『京大短歌』二〇一五年、一三九P)。  
そして私のこの歌への読みだが、まず曇  
り日の全てがここ〓眼前に集まって来る、  
そしてそれを捕まえるかのように鍋つかみ  
を両手に嵌めて待つ、という行為にはある  
危うさやヤバさがあり、それがこの歌のポ  
イントだと思う。

そして句切れについては、私も阿波野と  
同じに読んでいます。しかしその理由として  
は、へくる 鍋つかみ／両手に嵌めて待つ  
だと結句が字余りで弛緩した感じとなるの  
に對し、へ鍋つかみ両／手に嵌めて待つだ  
と句割れによって描写された行為が明確化  
し、危うさが増す、と考えられるからである。

このようなさまざまな口語歌の読みに對し  
ては、上の世代から微細なところに入り込ん  
でいる。という批判もある(吉川宏志「微細  
化するリズム感」『うた新聞』二〇一五年九月)。  
これはやはり、世代による口語歌への親和性  
の問題と思われる。つまり口語歌に慣れ親し  
んでいる若い世代にとつては、口語の細部に  
着目して詠み、読んでいくことは、スマート  
フォンなどのタッチパネルをピンチアウト〓  
指で広げ、両面を拡大して読むように、細部  
に入り込んでゆくというよりは、細部を拡大  
して読むような感覚なのではないか、と思う。  
私も若い世代の口語歌の読みを全て理解  
したり肯定したりしているわけではない  
が、かつては「棒立ちの歌」「短歌的武装  
解除」(穂村弘『短歌の友人』二〇〇七年)  
と呼ばれた口語歌を、さまざまな句切れな

どで読んで読みを深めていこうとすること  
は、口語歌論の進展として、それなりに重  
要と言えよう。

#### 四 大学短歌会を越えて

以上のように大学短歌会について取  
り上げてみたが、現在でも大学進学率は  
五二・〇%(平成二八年)であり、同世代の  
ほぼ半数の若者は働いたり、専門学校へ通っ  
たり、引きこもったりしている。したがっ  
て大学生以外の高校卒業以上の若者の歌も  
もっと詠まれ、読まれるべきなのである。そ  
ういった意味で、義務教育も受けられなかっ  
たという鳥居が『キリンの子』(二〇一六年)  
を上梓し、着目されたのはよかったと思う。  
・水槽の魚のように粉雪を見ている家に帰  
れぬ友と

孤兒院でのクリスマススの場面らしいが、  
初句・二句の直喩が効いている。

多くの若者がふとしたきっかけで歌に触  
れ、離れていったりする。若い人がいない  
と上流からの水の流が止まる川と同じで  
いつか枯渇してしまうので、うたい続けて  
いつて欲しいと思う。